



3

2025
March

No. 545

World Conference of Religions for Peace Japan



チャールズ・ボー枢機卿（上段左から2人目）とフランシス・クーリア事務総長（2月5日 ミャンマーの平和構築に向けた円卓会議）

こころの扉—「私たちを平和の器にしてください。」上原榮正	2
ミャンマーの平和構築に向けた諸宗教と国連/諸団体による円卓会議	3~4
被爆八十年 核兵器をなくす国際市民フォーラム	5
核兵器禁止条約の第3回締約国会議出席とWCRP/RfPサイドイベントの実施	6
人身売買禁止タスクフォース主催・現地学習会の開催.....	7
JNATIP主催「性的人身取引が野放しになっている日本」	7
WCRP会報 2025年度より季刊号に	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



「私たちが平和の器にしてください。」

戦後80年を迎えました。でも世界のあちらこちらでは、戦争や紛争、内戦などが続いております。特に、ロシアとウクライナ、イスラエルとハマス、ミャンマーでの戦争や内戦が一日も早く終結し、平和となりますように祈ります。

しかし、戦争がなければ平和であるとは言えません。東日本大震災での福島原子力発電所の爆発事故で避難し、未だに戻れない人たちがおられます。原発周囲の人々が常

WCRP日本委員会
聖公会
日本聖公会
理日首座主
ダビデ・上原榮正



に安全とは言えません。核抑止力のように、力と恐怖で人を抑えるの平和も真の平和とは言えません。人種、民族、出生の違いで差別や偏見を受けたりすることなく、誰もが自由で、安心、安全に暮らせることが真の平和です。

私は沖縄に住んでいますが、台湾有事や尖閣諸島問題では脅威を覚えます。また米軍と基地による事件や事故に、県民は不安と怒りの中に暮らしています。先の太平洋戦争では、沖縄では地上戦が行われました。

沖縄に日本軍が配備された時、県民は友軍と呼び、陣地構築、食料供出、宿泊所の提供などを行い、戦争協力をしました。しかし戦闘が始まると、それまで父や兄弟のような存在だった日本兵が一変しました。隠れているガマ（自然洞窟）から住民を砲弾の嵐の中に追い出し、食料を奪い、沖縄語を使えばスパイと見做して惨殺するなど、住民虐殺を行いました。優しい人たちが鬼の心を持つ人殺しに変えるのが戦争です。戦争は、国や家族を守るために人間性や人格まで変えてしまいます。本来人間は人殺しが出来る存在ではないはずですが、でもその人殺しを強いるのが戦争です。ベトナム戦では沖縄から多くの米兵が出撃していきました。帰還した兵士の7割強がPTSD（心的外傷後ストレス障害）になり、自殺者も出ています。人間の尊厳を奪い、人格を破壊するような戦争はしてはいけなさと信じます。戦争への備えではなく、平和のための備えと努力こそなすべきことです。

宗教は戦争や争いではなく和解や平和を、敵を憎み傷つけるのではなく赦しや慰めを、力や権力を持ち驕り高ぶるのではなく謙遜と慈悲を、倒れている人を助け起こし、神、仏のみ心を行うことを奨励します。世界を極楽浄土・神の国へ生きていて良かった、人生が楽しい、嬉しいと思える喜びと感謝に溢れる世界へと変えていくことが私たち宗教者の努めであると信じます。

平和を作り出す人は幸である。その人は、神の子と呼ばれる。

マタイによる福音書5章9節

ミャンマーの平和構築に向けた諸宗教と 国連／諸団体による円卓会議

WCRP日本委員会とACRPは2月5日、フォレストテラス明治神宮で「ミャンマーの平和構築に向けた諸宗教と国連／諸団体による円卓会議」を開催した。WCRP国際委員会共同会長を務めるミャンマー・ヤンゴン大司教のチャールズ・ボー枢機卿が緊急来日し、WCRP国際委員会のフランシス・クリリア事務総長と共に、深刻な人道危機を報告し、暴力の即時停止と緊急人道支援の必要性を訴えた。会議には、WCRP日本委員会に属する宗教者をはじめ国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所、赤十字国際委員会駐日代表部、



国連UNHCR協会、地雷廃絶日本キャンペーン、ワールド・ビジョン・ジャパンなどの日本のNGO、メディア関係者など56人が

参加した。

冒頭、WCRP日本委員会の戸松義晴理事長があいさつ。「ミャンマーの厳しい状況に胸が締めつけられている。一刻も早い停戦に向け具体的な行動について話し合いたい」と語った。

その後、ボー枢機卿が講演した。ボー枢機卿は主に三つの行動の必要性について報告した。一つ目は、ミャンマー全土の停戦に対する国際的な支援を挙げた。「この紛争により、数百万人が故郷を追われ、家族は離散し、何千人もの子どもたちが学校で明るい未来を築くという希望を奪われました。残念ながら、ミャンマーはあまりにも長い間、国際社会の慈悲の視線から見失われていたことを認めなければなりません。世界がい



チャールズ・ボー枢機卿

スラエル・ガザ地区やウクライナの危機に注目しているのは当然ですが、私たちの苦悩は人道

的な議論においては単なる脚注にすぎません。ほんのわずかの支援しか届いていません。平和と和解のあらゆる場において、この人々の涙や苦悩がより広く知られることが不可欠です。そのため、私は皆さまより積極的かつ持続的な関与を求めます」と切実に訴えた。

二つ目は、緊急人道支援の必要性である。ミャンマーでは、630万人の子供を含む約1990万人が人道支援を必要としており、その数は人口の約3分の1に相当する。ミャンマー国内には350万人の国内避難民がいるが、そのうち正式なキャンプで暮らしている人は15%のみである。残りの大多数は非公式な避難所やジャングルで過酷な状況に耐えており、食糧、医療、水の深刻な不足に直面している。さらに、100万人以上が近隣諸国に難民として逃れることを余儀なくされている。これらを踏まえ、「脆弱な人々への国際的な支援と効果的な支援の提供を早急に増やす必要性があります。こうした支援は、避難家族や子どもたちにとって、絶望を希望に変える一歩となるのです」と述べた。

三つ目は恒久的な平和の確保である。ボー枢機卿は、日本はミャンマーの平和へ

の歩みを支援する上で、他国に比べ有利な立場にあると述べ、紛争当事者間の対話促進、学校や病院の再建を支援する人道支援プロジェクト、若者の能力強化、地雷除去などの分野における日本の貢献に期待を寄せた。

最後にポー枢機卿は、「ミャンマーの人々、特に子どもや若者たちは、紛争の影の下で長きにわたって苦しんできました。私たちは、彼らに平和が遠い夢ではなく、生き生きとした現実となる未来を、彼らの希望、夢、可能性が完全に実現する未来を約束しなければなりません。私たちの努力が、永続する平和の種を蒔き、若者たちを力づけ、ミャンマーを癒し、この地域全体を豊かにする平和の配当をもたらすことを



願っています」と、講演を締めくくった。この講演を受けWCRP日本委員会の三宅善信理事（金光教春日丘教会教会長）は、ミヤ

ンマー軍事政権は民族間の分断を生じさせる意図があるのではないか。そのことへのWCRP/RFPミャンマー委員会の対応はどのようになっていくのか、と質問。ポー枢機卿は、民族間同士の対立があり、連携が困難である現状を説明しつつ、差別で深刻な被害を被っているロヒンギヤに関して、同ミャンマー委員会が長年にわたって人道支援を行なっていることを説明した。

その後、参加団体よりミャンマーに関する行動について報告がなされた。

UNHCR駐日所の宮沢哲氏は、日本における難民保護の改善の必要性を、赤十字国際委員会の西山秀平氏は、人道支援の現場における宗教的な精神面へのサポートの重要性を語った。また地雷廃絶日本キャンペーンの清水俊弘氏は、対人地雷の使用がロシアとミャンマーの2カ国で確認されていることを指摘。特に、ミャンマーでは2023年度は地雷による世界最大の犠牲者を生み出していると述べた。さらに、清水氏が取り組む地雷犠牲者の義足支援の事業が、空爆によって停止を余儀なくされている現状を報告した。浄土宗見樹院の大河内秀仁住職は、日本の政府開発援助（ODA）等のミャンマーにおける企業投資が軍事政



発言する浜島典彦評議員（右）

権に流れ、それが武器や弾薬につながっている可能性について語り、こうした日本からの資金の流れに関して注視すべきであると主張した。

委員会の浜島典彦評議員（日蓮宗総本山身延山久遠寺総務）は、自身のアジアにおける仏像修復の経験を語りミャンマーの平和を呼びかけた。

クーリア事務総長は、「宗教指導者は、分裂を超えた架け橋となることができる。ミャンマーの宗教指導者は党派的な存在と誤解されている。しかし、そうではない。Religions for Peaceは武力紛争の停止と文民政府の樹立を求めている。平和的共存のために、オープンな対話が必要だ」と、紛争下における宗教者の役割について語った。最後に、戸松理事長は、「宗教者として一刻も早く暴力を停止するために行動していきたい」と力強く平和への覚悟を語り円卓会議を閉会した。

被爆八十年 核兵器をなくす国際市民フォーラム

2月8日～9日、核兵器をなくす日本キャンペーンは渋谷区の聖心女子大学において「被爆八十年 核兵器をなくす国際市民フォーラム」を開催し、オンラインを含め約900人が参加した。来日中であつたフランス・クーリア博士（WCRP国際委員会事務総長）が8日のセッション「核兵器のない世界」を想像／創造する」に登壇した。以下、クーリア博士発表要旨。



クーリア博士（右から2人目）

広島・長崎への原爆投下から80年を迎え、核兵器がもたらす道徳的・人道的危機に改めて向き合う必要がある。核抑止論の誤り

核兵器は真の安全を保障するものではなく、恐怖による不安定な均衡を支え、人類を危険にさらしている。核の使用は、生命を広範囲に破壊し、地球環境にも深刻な被害を与える。核兵器の存在そのものが、意図的・偶発的な破壊の脅威を生み続けている。核兵器と人類の価値観

核兵器は平和と共存の理念に反し、人類の未来を脅かすものである。それらは力や威信の象徴ではなく、対立を優先する人類の過ちの証である。私たちは核兵器の保有・拡散を倫理的に拒否し、廃絶を求めべきである。

宗教指導者の役割

宗教指導者は、平和・正義・思いやりの理念を掲げ、核兵器の正当化に異議を唱えるべきである。WCRPは50年以上にわたり核軍縮を推進し、ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）と連携して具体的な行動を続けてきた。核兵器禁止条約（TPNW）を支持し、核廃絶のためのさらなる取り組みを強化すべきである。

核兵器のない世界へ

核なき世界は夢ではなく、実現可能な目標である。TPNWを基盤に、核兵器の役割を縮小し、核戦争の脅威を過去のものにするための具体的な行動を取る必要がある。

希望・行動・責任

核兵器のない世界は、より安全で、恐怖のない未来をもたらす。そのためには、希望を失わず、決断力ある行動が不可欠である。市民、指導者、国家が協力し、核の脅威を根本から取り除くことが求められている。広島・長崎の犠牲者を追悼し、核戦争の脅威をなくすために行動しよう。核兵器ではなく、人命と平和を最優先にする未来を築くことを誓う。

なお、開会セッションでは日本被団協の田中熙巳代表委員が登壇し、「核兵器の使用が現実的な脅威となる中、若い世代にこの問題を引き継ぎ、取り組みを進めていきたい。日本政府は核兵器禁止条約に参加していないが、核のない世界を実現するためには何ができるかを考え、運動を作りあげることが求められている」と述べた。

核兵器禁止条約の第3回締約国会議出席と WCRP/RFPサイドイベントの実施

WCRP日本委員会 事務局局長 篠原祥哲

3月3日～7日、米国ニューヨークの国連本部で核兵器禁止条約の第3回締約国会議が開かれ、WCRP/RFP日本委員会から篠原祥哲事務局局長が、同委員会国際委員会のフランシス・クリーア事務総長と共に出席した。

WCRP日本委員会は過去2回の締約国会議にいずれも出席している。創設以来、核兵器廃絶を核心的な活動目標としているWCRPにとって、核兵器を包括的に禁止し、全面的な廃絶を規定する核兵器禁止条約は、WCRPの宿願そのものである。WCRP日本委員会は10年前の2015年から毎年、代表者が日本政府の閣僚級大臣と面会し、核兵器禁止条約への支持と参加を要請してきた。



クリーア事務総長（左）と篠原事務局局長

この第3回締約国会議の重要性について、初日のハイレベルセッションで登壇した中満泉国連事務次長は、来年2026年に核兵器禁止条約の

初めての再検討会議が計画されていることから、この度の会合は禁止条約の今後の戦略的方向性を決定する重要な機会になるとし、「特別の責務」があると語った。5日間に渡って議論が行われた会議は、不安定化する世界情勢の中で「核兵器のない世界への取り組みを強化する」と宣言を採択して幕を閉じた。会議の内容や主な論点に関しては、長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）が詳しくレポートしている。RECNAは是非ご覧いただきたい。特に会議の中で印象に残ったことは、宣言の中で「真の安全保障は、核抑止論ではなく、核兵器の廃絶にある」として「核の脅しは容認できない」と謳ったように、人道上の視点とともにさまざまな科学的知見を駆使して、核抑止論の幻想から脱却し核兵器の禁止と廃絶こそが国家の安全保障の合理的な選択肢であると力説した議論が多かったことである。

WCRP/RFPサイドイベント

「核兵器廃絶のための道徳的義務に関する 宗教間、世代間、セクター間の対話」

会期中の3月4日、国連本部でWCRP/RFPはサイドイベントを開催した。その中で強調されたのは、第10回WCRP世界大会（2019年）で、世界の宗教者と共有した「他者と自己の幸福は本質的に共有される」ものであり、すべての人々が「つながりあういのち」で存在していると

いう信念である。フランシス・クリーア事務総長は「私たちの信仰の伝統は、それぞれが生命の尊厳と平和の道徳的要請を推進するものであり、核兵器に代表される道徳的・倫理的な違反に反対を表明する力を与えてくれる」と表明し、ICANのメリッサ・パーク事務局長は、「信仰に基づくアクターと市民社会は団結し、核抑止論に對抗し、世界の安全保障パラダイムの軍縮への転換を提唱している」と語った。私も、多くの宗教に共通して歴史的に語り継がれてきた信念は、「核の脅し」による安全保障とは相容れないと主張した。

ウクライナやガザの戦争において度々為政者から核兵器の言及がなされ「使用のリスク」が高まっている。核兵器は「仕方のない存在」になっているのではないか。核のリスクが非常に高まり、力の支配が席卷する現在の国際社会においてこそ、人道的視点と科学的知見をもとに、法と道徳に基づき国際秩序を



づく国際秩序を目指す核兵器禁止条約の存在の意義は重い。第3回締約国会議に参加して、改めて世界の危うさに抗う希望の砦としての核兵器禁止条約の普遍化の必要性を強く実感した。

人身売買禁止タスクフォース主催・ 現地学習会の開催

2月20日、人身売買禁止タスクフォースはマスジド大塚（東京・豊島区）を訪問し、現地学習会を実施した。

昨年7月27日に本タスクフォースは、『人間の尊厳を考える円卓会議』を開催し、マスジド大塚のクレイシ・ハールン事務局長と中村和義総務が、日本における人身売買の実情やマスジド大塚での人道支援活動について講演をした。今回の現地学習会は、宗教者として人身売買禁止を社会に訴え、人身売買の被害者や支援者とのさらなる対話を深めるために開催された。

当日は、マスジド（イスラーム教の礼拝所）にタスクフォースメンバーら7教団12人が訪問した。礼拝の見学後、マスジド大塚の国内外における人道支援活動について、ハールン氏と中村氏より説明を受けた。加えて、マス



マスジド大塚

ジド大塚から支援を受けている難民申請者との対話を行った。彼は、シエラレオネから他国を経由し、妊娠中の妻を連れて日本に逃れてきたが、2週間ホームレス状態となっていたところでマスジド大塚の支援と繋がりが、生活の基盤を整え始めることができていると語った。

参加者からは、「難民状態にある方が、2週間も日本でホームレス状態に陥っていたと聞きショックを受けた。もっと日本社会にこの問題について働きかけていきたい」「WCRPだからこそ出来る具体的な行動を取っていききたい」といった感想が述べられた。

JNATIP主催 「性的人身取引 が野放しになっている日本」

WCRP日本委員会が運営メンバーを務める人身売買禁止ネットワーク（JNATIP）は2月26日、衆議院第二議員会館で院内集会を開催し、国会議員8人を含め、約60人が参加した。

集会ではJNATIPメンバーの3団体から報告がなされた。初めにオズボーンゆり氏（ゾエ・ジャパン相談支援マネージャー）は、CSECC（児童の商業的性的搾取）とCSAM（児童性的虐待コンテンツ）

の2種類を説明。巧妙化する手口で子どもたちが被害に遭っており、早い時には、初めの接触から1時間で脅迫に至る事例を紹介し、新たな法規制の必要性を強く訴えた。

坂本新氏（レスキュー・ハブ理事長）は売春目的に客待ちをする『立ちんぼ』やホストクラブの売掛金問題について言及。売春防止法では、買春に対して罰則は定められていないと指摘し、脆弱な状況にある女性により脆弱な状況に追い詰められていると語った。

金尻カズナ氏（ぱっぶす理事長）は、非合法組織が歌舞伎町などで望まない妊娠に不安を感じている女性たちに対し、安全性が保障されていない海外製の緊急避妊薬を病院の半値以下で販売していると明らかにした。金尻氏はこうした現状を「福祉の敗北ではないかと思う」と吐露した。

院内集会の最後には、性的人身取引の防止と撲滅のために、法規制や相談・支援の強化、教育・啓発の実施などを求める緊急要請書を採択した。要請書は今後、法務省や厚生労働省、こども家庭庁などに提出する予定である。



JNATIPの院内集会

WCRP会報

2025年度より季刊刊行

WCRP日本委員会の機関誌として、1978年12月の第1号より発行してきた『WCRP』は、今月号で545号を数えた。2025年度より、季刊号として装いも新たに3カ月に一度の発行をめざし再出発する。これは、SDGs（持続可能な開発目標）やWCRP日本委員会アジェンダ2030のもと、新年度より取り組む運営・業務改善の一環でもある。

第1号の編集後記には、不定期な「プレス・リリース」として・ニュースや活動を伝えることに主眼をおいていたものから、啓発や広報をはかる一助として誕生したとある。



第1号の表紙

今後は、4月発刊の春号より年4回の季刊発行となるが、ホームページやSNSなどにタイムリーに記事をアップするなど努めていきたい。なお、7月発刊の夏号よりページ数を増やしてお届けする予定である。

今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し、新しい熟語を作ります。

会歩（あゆむ）

東海道新幹線の車内チャイムのメロディーが流れた。3月末で任期満了となる私は、曲の余韻とともに在任中のワンシーン・ワンシーンが思い出された。靴をすり減らし、コロナ禍でも歩いて現場に向わってきた5年半の出会いに感謝します。

WCRPの活動

《3月》

3～7日 核兵器禁止条約第3回締約国会議、WCRP／RFPサイドイベント

出席（アメリカ・ニューヨーク）

10日 気候危機タスクフォース第3回会合（東京・普門メディアセンター／オンライン）

13日 女性部会「いのちに関する学習会」（清泉女子大学）

14日 第51回理事会、平和大学講座（京都・北野天満宮文道会館／オンライン）

27～28日 平和研究所合宿／第9回所員会議、第8回研究会（熱海）

31日 気候危機タスクフォース「いのちの森プロジェクト」森の整備（埼玉・所沢）

《4月》

12日 気候危機タスクフォース「いのちの森プロジェクト」タケノコ掘り（埼玉・所沢）

14日 人身売買禁止タスクフォース第1回会合（オンライン）

26～27日 和解の教育タスクフォース第3回ファシリテーター養成セミナー（東京・オリンピックセンター）

28～30日 ACRP執行委員会（シンガポール／オンライン）

掲載内容の無断転載を禁ず。